

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04454

研究課題名(和文) 教員の職能形成に資する大学の教員養成カリキュラムの実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study of Teacher Training Curriculum of Universities Contributing to the Formation of Teacher Competencies

研究代表者

小原 一馬 (Kohara, Kazuma)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：20396617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、宇都宮大学教育学部の卒業生調査より、教員養成学部での学びと卒業後の教員としての力との関係について、次のことがわかった。大学時代、知識よりも考え方を学ぼうとしたり、学んだことをどう応用できるかを意識して学ぶなど、自主的に学ぶ姿勢を持って学んでいた人はそうでない人に比べ、教師になった後で、情報収集・授業での実践・振り返り・理論化、というサイクルを通じて、より広く深い学びを行っており、その結果、教師としての力を高めていること。ただし1975年以前に入学した者については、授業で与えられた課題にまじめに取り組む姿勢のほうが、教師としての力量をつけていく上でより重要であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学でのどのような学びが、その後の職業生活で役立つのかということについては、これまでも研究が進められていたが、大学における教員養成に関しても、それらの先行研究で言われていたような「応用を意識した学び」が重要であることが確認された。また大学での学びが教員の力量形成につながっていくメカニズムとして、それが教員になってからの学びに影響しているからだということもわかった。これは今後の教員養成において、いわゆる知識の詰め込みではなく、学びの学びとも言えるメタ学習を重視すべきだということの意味している。

研究成果の概要(英文)：In this study, the following results were obtained from the survey of graduates of Faculty of Education, Utsunomiya University on the relationship between the studying in the teacher training course and the ability of teachers after graduation. (1) In college, those who have tried to learn how to think rather than just knowledge itself, or those who have been aware of how to apply what they have learned, and those who have taken a proactive approach to learning, are more likely than those who have not, after becoming a teacher, to engage in broader and deeper learning through a cycle of information gathering, classroom practice, retrospectives, and theorizing. As a result, they are improving their skills as teachers. (2) However, for students who were admitted in 1975 or earlier, it was more important for them to take the assignments given in class seriously in order to develop their skills as teachers.

研究分野：教育社会学

キーワード：大学での教員養成 大学での学び方 教員の学び

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、大学の教育効果や社会への接続を問う教育社会学的研究と、教育カリキュラムの変遷と効果を問う教育史的研究という異なる複数の分野の学際的研究の結節点として計画された。教育社会学においては、つい10年ほど前まで大学入学後の社会化機能よりも入学前の選抜・配分機能を重視するスクリーニング理論が大きな影響力をふるい、学校から就職へのトランジション研究において強い説明力を誇ってきた(荻谷 2010)。しかし1991年の文部科学省による「大学設置基準の大綱化」以降、2004年の国立大学法人化にも象徴される大学の「自由競争」を重視する政策転換の流れの中で、大学の教育機関としての責任放棄を自己正当化する一種の開き直りともとられかねないこのような言説にも見直しが迫られるようになっていった。本研究もこうした、大学の教育機能の実証的研究の中の一つとして、教員養成系学部における大学での学びと教員の力量形成の関係を示すものとして構想された。

一方、教員養成カリキュラムそれ自体の検討も、近年、教員養成カリキュラム開発研究センターを設置していた東京学芸大学、教員養成学研究センターを設置していた弘前大学などを中心に、時期を限定した検証が行われはじめていた。しかし、教員養成カリキュラムの変化が教員養成の営みや結果にどのような影響を与えたかを、長期的なスパンで検討したものはない。『大学教育学部 年史』などの教育学部史が編まれた時代には、こうした教員養成カリキュラムに言及しているものが少なくないが、授業科目の紹介に止まっている。教員養成カリキュラムを、教員の職能形成との関係で問うという視点を欠いている。

近年、今後の教員養成に対する提案も行われているが、これまでの取り組みを検証するものでなければ、砂上の楼閣となってしまうであろう。上記のような課題意識より、本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

上記のような背景により、本研究では 大学でのどのような学びが、教員としての力量形成につながっているか、 そのような学びは、どのようなカリキュラムに対応しているか を示すことを主な目的とする。

3. 研究の方法

まず『宇都宮大学便覧』、『学生便覧』、『宇都宮大学一覧』(いずれも附属図書館書庫所蔵分)掲載の学科課程表の変遷を確認し、特に卒業単位数に注目し、学芸・教育学部の教員養成カリキュラムの時期区分を検討

そのうえで、教員の力量形成と、大学での学びおよびカリキュラムとの関係を探るため、宇都宮大学教育学部の卒業生のアンケートおよびインタビューを行った。

調査時期 アンケート 2018年11月~2019年3月 インタビュー 2019年9月~11月

調査対象 アンケートA、B インタビューC

A 宇都宮大学教育学部(前身となった学芸学部を含む)の卒業生で現在、栃木県内の公立学校で教職についている人。

B 宇都宮大学教育学部の卒業生で、県内の学校を退職し、同窓会宇都宮支部に住所が登録されている人。

C アンケートにおいてインタビュー協力可能と回答した100名の中から教師効力感の高かった18名を選び、うち連絡のついた13名のインタビューを実施。

調査方法

調査票を勤務校に郵送。記入後郵送してもらった。小学校305

校、中学校132校に2444通発送。回収数 630

調査票を自宅に郵送(337通) 記入後郵送にて回収。回収数 103

半構造化法にて、大学での広い意味での学びと教師としての技術の獲得との関係についてインタビュー

4. 研究成果

(1)

『宇都宮大学便覧』、『学生便覧』、『宇都宮大学一覧』(いずれも附属図書館書庫所蔵分)掲載の学科課程表の変遷を確認し、特に卒業単位数に注目し、学芸・教育学部の教員養成カリキュラムの時期区分を検討した。その結果、1)学芸学部発足、2)学芸学部に教員養成課程が設置された時期、3)1990年前後の副免制度廃止及び教育職員免許法改正、4)1993年の卒業単位数大幅削減、5)教員養成課程の統合(「学校教育教員養成課程」へ)等を指標に、少なくとも5期には区分できることが明らかになった。この区分に基づき、カリキュラムの変遷の効果

を検討することとした。

(2)

アンケート調査の準備のために、大学教育の卒業後の効果に関する実証研究を、教育社会学・教育経済学、キャリア教育、経営学の三つの分野との関係から整理し、その背景を、特にシグナル理論との関係、およびキャリア教育の発展の影響という観点からまとめた。その上で、それらの代表的な研究を紹介しつつ、その結果の共通点を見出し、今後行う予定の教員養成系学部の卒業生調査を実施する上で考慮すべき知見を考察した。この成果は以下の2017年発表の論文にまとめられた。

(3)

大学教員養成カリキュラム評価のための基礎的検討として、教職就職6年目の小学校教師に、大学における教員養成に留意して、小学校教師の力量形成過程に関して省察を試みてもらった。その結果、大学時代は学校教育に関する基礎的な概念や専門用語を、時間をかけて学び、わがものとしていくが、なかには不登校や発達障害のように教職就職後すぐに効力を発揮する内容も含まれていたことがわかった。教員養成カリキュラム評価の調査を行う際には、高等学校卒業生が教職就職に至るまでの変化を把握し、そうした変化を的確に掘り取ることができるような枠組みを設定する必要があることが確認できた。この結果は以下の2018年発表の論文にまとめられた。

(4)

栃木県公立学校教員採用候補者選考試験(いわゆる教員採用試験)に関する歴史的研究として教員養成カリキュラムの背景に関する検討を行った。文部省編『教育委員会月報』誌を用いて先行研究が言及してこなかった文部省の教員採用候補者選考試験施策に関して述べながら、栃木県教育委員会編『教育月報』誌、同『教育とちぎ』誌及び「栃木県公立学校新規教員採用選考要項」(1988年度以降)、『教職課程』誌を用いて栃木県公立学校教員採用候補者選考試験の変遷を検討した。検討の結果、次のことが明らかになった。(a) 地方教育行政の組織及び運営に関する法律以前は、大学が教員採用志願者名簿を一括して提出することになっていた。(b) 地教行法制定以後、現在のような競争試験のかたちが採られるが、その場合も小学校・中学校・高等学校の校種間併願がしやすかった。小・高の併願さえも可能であり、実際に受験者もいたということである。(c) この三校種間併願は1979年度以降厳しくなり、2002年度には校種間併願も不可能になった。しかし、2005年度から義務教育段階の校種における校種間併願が認められ、現在に至る。(d) また、1990年度以降特別選考が拡大され、それとともに筆記試験が軽減されるようになった。(e) そのほか、1980年度までは国立大学出身者が義務教育教員の合格者の上位を占めていたが、1981年度以降急に私立大学出身者が合格者の上位に入ってきたことも明らかになった。この結果は、以下の2019年発表の論文にまとめられた。

(5)

宇都宮大学教育学部の卒業生調査より、教員養成学部での学びと卒業後の教員としての力との関係について、次のことがわかった。大学時代、知識よりも考え方を学ぼうとしたり、学んだことをどう応用できるかを意識して学ぶなど、自主的に学ぶ姿勢を持って学んでいた人はそうでない人に比べ、教師になった後で、情報収集・授業での実践・振り返り・理論化、というサイクルを通じて、より広く深い学びを行っており、その結果、教師としての力を高めていること。ただし1975年以前に入学した者については、そのような自主的に学ぶ意識よりも、授業で与えられた課題にまじめに取り組む姿勢のほうが、教師としての力量をつけていく上でより重要であった。それ以降そのような、大学でまじめに学ぶという姿勢は教師になってからの力に影響を及ぼしていない。こうしたことから、今後の教員養成カリキュラムの開発においては、考え方を学ぶという態度の養成という、一種のメタ学習が求められることがわかった。この研究の成果は現在「教育社会学研究」に投稿中である。

(6)

宇都宮大学教育学部の卒業生調査より、大学での学びやその役立ち感については、時期によって大きく変動しており、その変化の背景には、学生の学びの姿勢(より楽に単位をとりたい/まじめに授業に取り組みたい)が見られた。まじめに勉強する者のほうが学んだ実感が得られる、もしくは逆にそうした実感のあるものが熱心に学ぶのだと考えられる。近年のそうした学びの態度の背景には、学部の在り方の変化や教員採用数の増減も関係が見てとれた。具体的な学びとしては、授業を通じて「関心が深まったり」「理解が深まったり」した場合、また卒論に打ち込むことで、カリキュラム全体の役立ち感を高めていた。教員養成カリキュラムは、そうした学びの

在り方を通して、卒業後の役立ちにつながっていくものと考えられる。また学びのパターンとして、良い成績をとることの意味づけや自主的に学ぶ者の性格が1970年代以前と以降で変わったこともわかった。この研究の成果は以下の2020年発行予定の論文にまとめられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 瓦井千尋・丸山剛史・小原一馬	4. 巻 69
2. 論文標題 戦後の栃木県公立学校教員採用候補者選考試験の歴史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部研究紀要 第一部	6. 最初と最後の頁 253-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小原一馬	4. 巻 67
2. 論文標題 日本における、大学教育の卒業後における効果の検証研究のまとめと課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部研究紀要 第一部	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 丸山剛史・平野さや香	4. 巻 4
2. 論文標題 小学校教師の力量形成に関する省察 - 教員養成カリキュラム評価のための基礎的検討 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 215-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小原一馬・丸山剛史・出口明子・岡澤慎一・良香織・三石初雄	4. 巻 6
2. 論文標題 教員養成カリキュラムによる学びの実感と学び方の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三石 初雄 (Mitsuishi Hatsuo) (10157547)	東京学芸大学・次世代教育研究センター・客員教授 (12604)	
研究分担者	艮 香織 (Ushitora Kaori) (10459224)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	
研究分担者	岡澤 慎一 (Okazawa Shin'ichi) (20431695)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	
研究分担者	丸山 剛史 (Maruyama Takeshi) (40365549)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	
研究分担者	出口 明子 (Deguchi Akiko) (70515981)	宇都宮大学・教育学部・准教授 (12201)	
研究分担者	瓦井 千尋 (Kawarai Chihiro) (90738775)	宇都宮大学・教職センター・教授 (12201)	